

## 近代精神と宗教理解

— シュライエルマッハーの宗教理解を廻って —

築 山 修 道

## 序

人間のあり方と彼の宗教的関心とが密接な連関をもち、しかもわれわれの宗教理解は各人の現実の宗教的関心によつて基本的に規定されるとするならば、近代における人間の宗教的関心とその宗教理解とは如何なる性格をもつたものであろうか。近代における人間のあり方が、古代・中世的人間のあり方とは本質的に異つた「近代人」特有の性格をもっていると考えられる限り、われわれはまた近代の人間に特徴的な宗教的関心と理解を認取することが出来るであらう。かかる問題意識から、従来近代プロテスタント神学の父と称されて来たシュライエルマッハーの宗教理解を

廻つて、「近代精神と宗教理解」という大きな問題について一考察を試みようとするのが本小論の眼目である。

## 一

シュライエルマッハーの宗教に関わる基本的な態度は、彼の宗教についての次のような形式的定義のうちに端的に表明されている。即ち「宗教は、形而上学のように、宇宙をその性質に従つて規定し且つ説明しようとは欲せず、道徳のように、自由の力及び人間の神的自由意志から宇宙を發展させ、且つ完成させようとは欲さない。宗教の本質は、思惟 (Denken) でも、行為 (Handeln) でもなく、直観と感情 (Anschauung und Gefühl) である。宗教は宇宙を直

観せんとし、宇宙自身の表現と行為との中に在って、帰依の念を以て (andächtig) 宇宙に耳を傾け窺わんとする。<sup>①</sup> 全ての教会的共同体の基礎を形成する敬虔 (Frömmigkeit) とは、純粹にそれだけを考察すれば、知識 (Wissen) でも行為 (Tun) でもなく、感情の即ち直接的自己意識の一樣態である。敬虔の常に変わらない本質は、われわれがわれわれ自身を絶対的に依存する (schlechthin abhängig) ものとして、つまり神と関係するものとして意識することである。<sup>②</sup> かかる叙述は、シュライエルマッハーの宗教に関わる態度が、聖なるもの (宇宙或は神) に対する「敬虔乃至帰依の感情」を根底としていることを示唆しているであろう。そしてシュライエルマッハーはしばしば「敬虔」を宗教そのものと見做し、宗教の同義語として使用する。

さて、彼の宗教に関わるこのような態度は何を意味するのであろうか。敬虔は、固宗教における主観的側面を示す用語で、キリスト教的には謙讓にして神に自己を委ねる態度を謂う。新約聖書においては「信仰深い」或は「信心深い」(devout) 等と訳され、キリスト教徒のもつべき徳の一つとして説かれている。それは外的形式的なものではなく、真心をもって神と人々とに奉仕する嚴肅で誠実な態度である。敬虔は通常礼拝、信条、礼典等の形式のうちに埋没し

ているが、心に深く呼びかけを受ける時、その形姿をあらわす。深き淵よりささげられる祈りは、その最も基本的な姿であると言ふことが出来よう。しかしこのように敬虔が信仰者における宗教的実践の主観的側面として重要な要素であるということは、直ちにそれがわれわれの宗教生活における感情的・心情的領域にのみ限定されることを意味しないであろう。なぜなら、敬虔なる者とは知・情・意のすべてを奉げて神に帰依する者であると考えられるが故に、敬虔は、単なる感情乃至心情の働きののみ解されるべきではなく、むしろ神の本性性、聖性、父性を認識する知性を前提とし、神を畏れ、崇め、敬ひ、愛する意志行為とも見做されるであろう。かくして、聖トマスは「敬虔を神に奉仕する意志」と見た。<sup>③</sup>

然るに、シュライエルマッハーは、上に見た如く、敬虔をそれ自体として考察すれば、知識でも行為でもなく、感情即ち直接的自己意識の一樣態であると規定して、敬虔における感情的・心情的側面を特に重視する。勿論そのことは、敬虔が知識と行為とに無関係であるとか、或は知識と行為とを自己の内に蔵していないということではなく、敬虔はそれ自体としては本質的に一つの「感情の状態」であるという意味である。しかし彼が敬虔の本質を感情的領域

に限定して、それをすべての教會的共同体の基礎概念と考えたということは、彼が宗教における主観的・感情的契機に重要な意義を認めたということと根本的な結びつきをもつが故に、そのことの意義は重大である。彼の神学的名著である「キリスト教信仰」は、かかる意味での「敬虔」を神学の基礎概念として展開した近代プロテスタント神学における最初の組織的著作であった。

ところで、宗教における主観的乃至主体的側面を重要視し、宗教的事象を人間の立場（自我または理性的立場）から問題にしようとする宗教理解の態度は、近代的人間の宗教的関心に底流する基本的な性格であると考えられる。近代的人間の宗教理解のうちに見られるかかる特徴的・基本的性格は、ハイデッガーの言葉を藉りて言表するならば、現存在の有の諸可能性 (*Seinsmöglichkeiten des Daseins*) の一つとして、人間のあり方 (*Seinsmodus*) と彼の宗教的関心及び理解とが根本において切り離せないかたちで一つに結びついていることの歴史・事實的表明である。つまり、「近代の人間」とか「近代的人間」と言われる場合の人間の基本的な立場は、人間が自らを自由な意思をもった「主体」として自覚するようになったということである。近代におけるこのような人間のあり方は、中世のキリスト教的世界を支配した、超越的な創造者としての神を自己の

唯一の存在根拠として信仰する人間のあり方とは本質的に相異している。それ故、近代的人間のあり方を一般的に「私の自覚」を根拠とした「主体的立場」として特徴づけることが出来る。これに比して、中世的人間のあり方は、一切を神のめぐみに帰属せしめる神を中心とした「信仰的立場」として性格づけられるであろう。中世末期から、ルネッサンスを通じて近世にかけて漸次確立されて来たかかる近代的人間の立場は、種々の方面において様々の形で表現された。例えばわれわれは、このような人間の主体的立場を、宗教においては信仰における個人の尊厳性を重要な理念の一つとする宗教改革、宗教的個人主義の出現による教會的權威の退潮、理神論の抬頭等の有力な内的原因と考えることが出来る。また哲学的・思想的にはデカルトの「コギト・エルゴ・スム」の立場がこれを最も明確に表明したと言えるであろう。このように近世における人間の主体的自覚（自我）と宗教における主観的側面の重要視とは相関し、密接に絡み合っていると考えられるが、そのことは更に突詰めて言えば、宗教領域への「自我の反映乃至投射」とも考えられる。

然るに、デカルトの「コギト」によって代表される近世的主体乃至自我とは如何なる性格のものであろうか。デカルトのコギトの立場が如何なるものであるかについて今は

詳論することを差し控えるが、ここでは以下の論述との関連において必要と思われる二三の点だけを指摘するに留める。第一に、近世的主体は確實性 (Gewissheit) を自らの内に直接保有する自証的個体であること。第二に、それは悟性的乃至理性的思惟 (実践理性をも含めた) を本質とする知的主体であること。「コギト」の第一の性格は、直接的自己意識の内に与えられた直証性を確實性の根拠とする自我の直覚的・経験的側面である。その第二の性格は、基礎概念乃至共通概念 (公理、定義等) と推論・演繹等によって真理を論理的・概念的に把握する自我の思弁的・反省的側面である。デカルトの「コギト」は本来かかる自我の二面を荷うものであったが、後にコギトの第一の側面を哲學的に考察・發展せしめた立場として、イギリス経験論・実証主義・心理主義等の方向を、また第二の側面を認識論的乃至形而上學的に發展せしめた立場として大陸合理論の方向を考へることが出来る。デカルトが近世哲學の父祖と言われ、彼の「コギト」の立場が近代的人間の立場としての「自我」を代表していると見られるのはこの所似である。そして更に注目すべきことは、かかる自我の本質は、近世的知が単に受動的、観想的な知ではなく、能動的、実践的知であることを基礎づけ、以て近世の知的主体

は同時に実践的主体の性格をも含んでいることを根拠づけているということである。

近代になって宗教の主観的乃至主体的側面に重要な意義が認められて来たということには、以上のような歴史的、思想的背景が深く底流していた故であると考えられるが、しかしそのことと宗教における感情的・心情的契機が重視されるということとは直ちに一つではない。なぜなら、先述した如く、近世的主体の主要な性格は悟性的乃至理性的思惟を本質とする知的主体であるからである。従って近世的主体の本質性格からすれば、むしろ宗教における知的・意志的契機を重視することの方が自然の成り行である。實際思想的に見て、シュライエルマッハーと同時代の人々の中で、ヘーゲルは宗教における知的・認識的契機を重視し、またカントは意志的・実践理性的契機に重要な意義を求めた。即ち、ヘーゲルは『宗教哲學講義』において次のような見方をしている。宗教と哲學とはその内容 (人間精神における絶対者の自己顯現) においては同じものであるが、ただその形式において相異するにすぎない。宗教は表象思想の形式において絶対者を敘述し、認識するが、哲學はこれを純粹に論理的な思想において敘述し、概念に従って認識する。哲學は宗教を解明することによってのみ自

らを解明し、また自らを解明することによって宗教を解明する。ヘーゲルのかかる宗教理解の立場は、いわば宗教Ⅱ哲学であり、哲学は自らの本質を概念・思想的に把握する宗教である。そしてヘーゲルは、このような精神現象学的立場から、知るものとしての精神が自己自身を実現し、即且対自的存在となった絶対知を「絶対的宗教」と呼んで、自からの宗教的立場とした。

他方、カントは『宗教論』において、彼の批判哲学の立場から、宗教を理性宗教乃至純粹宗教と啓示宗教乃至応用宗教とに分類して、両者が同心円的な関係にあると言っている。つまり、宗教は、(これを主観的に見れば)われわれの一切の義務を神的命令として認識することである。あることを私の義務として承認するために、それを神的命令であるとして承認する前に、それが義務であることを私が予め知っていなければならないような宗教は、自然的乃至理性的宗教である。これに反して、あることを神的命令として私が前もって知っていなければならないような宗教は、啓示された乃至啓示を必要とする宗教である。前者の基礎には理性神学とその道徳があり、後者の基礎には啓示神学とその道徳がある。そして啓示は純粹な理性宗教をも自らのうちに含むことが出来るが、しかし逆に理性宗教は

啓示宗教の歴史的なものを含むことが出来ない。従って、前者はア・プリーオリにそれ自身で存立すると考えられるが、後者は前者の要求するものを具体的に遂行するために付加され、前者を補足するものと考えられる。このようにカントは、啓示宗教の存在意義を認めながらも、宗教の本質内容を道徳的实践(義務の完遂)に求め、以て真に普遍的な宗教は純粹な「理性宗教」或は「道徳宗教」であると称して、これを自らの宗教的立場とした。

さて、右のようなカント及びヘーゲルの見方は、宗教の真の本質を全面的に正当に捉えたものであろうか。固より、知乃至認識或は意志的・道徳的实践という契機は宗教においても確かに重要な意味をもつであろう。しかし宗教に関してこれらの側面のみを強く前面に押し出し、以て宗教の本質性格を規定することは、必ずしも宗教の本質の独自性を正当に認取することにはならないであろう。これに對するに、シュライエルマッハーは、宗教的関心を敬虔に求め、敬虔の本質を感情形態に限定して、宗教の主観的乃至主体的側面を重視するに、直観的・感情的契機を以てした。それ故われわれは、シュライエルマッハーのかかる見方が何処から由来し、またそのことの意義は何であったかを次に考察しなければならない。

## 二

シュライエルマッハーが宗教または敬虔の内面的・感情的契機を重視した根拠として、われわれは大きく二つの方向を考へることが出来る。一者は思想的な事柄にとつてはいわば外的な契機とも思われる理由であり、他者は内面的理由によるものである。先ず前者について略述する。周知の如く、シュライエルマッハーにとつてその生い立ちには彼の人格・思想形成に資するところ少なくなかつた。両親が共に敬虔なヘルンフト兄弟団の一員であつたがため、シュライエルマッハーは彼の初期の教育をこの兄弟団で受けることになつた。その後彼は、宗教的懷疑を抱き、それを解決せんがためにハレ大学へ転校して、啓蒙の哲学及び神学の影響のもとにカント哲学を研究した。しかしデイルタイが指摘しているように、彼の思想傾向を根本的に決定したのは、カント哲学でもまた彼が後に学んだスピノザ哲学でもなくして、ヘルンフト兄弟団から受けたその影響であつたと見るのが正鵠であろう。<sup>⑧</sup> 敬虔主義一派であるこの兄弟団の根本精神は、それが形成された歴史的、宗教的事情と密接に係合して、形式主義と教派主義に墮することを斥け、宗教における心情的要素を重視し、信仰の内面

化と魂の敬虔とを力説する点にあつた。即ち教理主義的、倫理主義的色彩の濃い教義を排し、聖書のみに基づく信仰と実践によつてキリストの教えに帰り、イエスの福音を日常生活の中に生かし、キリスト信徒の眞の交わりを実現することであつた。そして実に、彼等は宗教的に非常に敬虔であると共に、自らの教えを実践することにおいて純粋で且つ熱心であつたが故に、この兄弟団の宗教精神と信仰生活は、一方でシュライエルマッハーの信仰論を中心として展開する近代神学を準備し、他方で十八世紀末葉から十九世紀に亘つて、ドイツの国民文学・思想、諸大学の精神にも大きな影響を及ぼしたと見做されている。

次に上の事柄とも関連して、しかももう一つの有力な理由として、われわれは、当時最高潮に達していたロマン主義運動を主導したF・シュレーゲル(一七七二—一八二九年)を初め、ロマン主義思潮の影響を看過してはならないであろう。啓蒙主義の計量的・批判的理性に対する反動として起つたロマン主義運動にとつて、自らの理想——有限者の中に無限者の現在化を果し、すべての有限な形式を超える無限者の動的な力と、自分の置かれた有限状況への如何なる束縛からも無限に超越しようとする脱我的経験によつて自由を獲得する——を実現するためには、直観

的、感情的、審美的契機は重要な意義をもつものであった。P・ティリッヒの見解によれば、種々の点でロマン主義は啓蒙主義に対立しているが、それは啓蒙主義に感情が欠けていたからではない。ただ啓蒙主義の感情は、創造的・統一的エロースの欠落した単に主観的感情であつた。しかしロマン主義の感情は単なる主観、感傷ではない。無限者が有限なものすべての内に存在するとするならば、有限者における無限者の認識は直観的でなければならぬ。そしてこの神秘的直観は、感情から切り離されてあるのではなくして、感情を直観の行為そのものの中に取り入れることによっていわば感情を客観化する働きをもっている。このように有限者における無限者の直観において、感情的要素と認識的要素とが結合しているのが創造的・統一的エロースと言われるものである。この意味においてロマン主義の中には、単に主観的・感傷的ではなく、啓示的でプラトンのようなエロースの性格をもつ感情がある。かかる観点から見れば、シュライエルマッハーがプラトンの偉大なロマン主義的翻訳者であつたのは、単なる偶然の一致ではないであろう。⑤。シュライエルマッハーの初期の名著『宗教論』はロマン主義のかかる性格を受容して著わされたもので、その基調にはロマン主義思潮の影響が多分に感じられる。

さて、内的理由として否定的・消極的理由と肯定的・積

極的理由とが考えられるが、しかしこれは当時の思想的状況の認識を踏えてのみ正しく理解され得るであろう。シュライエルマッハーの『宗教論』は、その表題「宗教について宗教蔑視者中の教養ある人々に寄せる講演」が端的に表明しているように、その書物が著述された目的を、当時の宗教理解に対する批判と宗教そのものの弁証においている。即ち彼は宗教自身の立場から、宗教が哲学（形而上学）及び道德とは明確に区別されなければならない宗教の固有な領域と目的とが何であるかを闡明にし、以て宗教独自の本質を確保せんとしたのである。そしてそのための批判と弁証が、外に対しては啓蒙主義または合理主義の立場から帰結する宗教理解（自然神学、道德宗教等）に、また内に対しては正統主義神学に向けられた。⑥。

それではシュライエルマッハーの批判と弁証は、彼自身のどのような原理的立場から、彼等の如何なる点に対して遂行されたのであろうか。シュライエルマッハーの啓蒙主義と正統主義に対する原理的批判は、両者がそれを前提として成り立っているところの「二元性」の原理であると考えられる。啓蒙主義と正統主義はその立場を全く異にしているが、両者が共有しているものは「同一性」の原理ではなくして、「二元性」の原理である。つまり、「無限」と「有

限、「超越的・神的なもの」と「内在的・理性的なもの」、  
 「啓示」と「自然」、「非合理的なもの」と「合理的なもの」の相互の対立・背反または分離・乖離という二元性である。そして啓蒙主義におけるかかる二元性は、「理性の自律」を招来し、理性の原理に基づく、神的なものの概念化、啓示の自然的解釈、非合理的ものの合理化を帰結した。それは、認識の領域における神の本性の論理的・概念的把握、或は神の存在の論理的証明（宗教の形而上学化）を、また実践の領域における神的命令の内在化乃至義務化（宗教の道徳化）を、一般的に言えば、宗教の合理化乃至理性的宗教を産出した。そしてこのことは、神と人間との関係における神中心から人間中心への一種の逆転であり、宗教関係における近代的自我の神への投射を意味するであろう。

次に正統主義における二元性は、啓示（超自然）と自然、宗教改革者の神学とこれに反する教説との峻別・乖離である。その神学は、啓示の真理を扱う啓示神学を上部構造に、自然の真理を扱う自然神学を下部構造にもつ、二重構造から成り立っている。正統主義の神学的前提は宗教改革者とその神学との規範化、客観化にあると見られるが、そのような神学的体系化の目指したものは、一方では自らの弁証であり、他方ではカトリック教会及び他の教派の教義と倫理

に関する論難であった。そしてその結果は、主知主義的な敬虔を神学の本質と同一視し、教会の信条を絶対化してそれに無条件に準拠することを要求する神学的傾向を招来した。それ故、このような性格をもつ正統主義は客観主義、形式主義に墮しその体系は内面的な厳密さをもっていて、非常に進歩した論理的能力と厳しい誠実さから生れたものではあったが、しかしそれは、既に宗教的生命と創造力とを喪失した時代の産物であって、宗教改革者の本来の神学の化石的意義しか持ち得なかった。即ち正統主義は、宗教改革者から信仰の個別的・経験的要素を継承したはずにもかかわらず、彼等の神学及びその根拠としての聖書の啓示の絶対性・客観性を強調する余り、信仰者における個別的・内面的・経験的契機を軽視しすぎて、信仰による神的生命との生きた交わりを次第に喪失し、形式主義と權威主義とを帰結した。このように自らの宗教的生命と創造性とを喪失した正統主義の形式主義・客観主義に対する反動として、その生命を回復すべく、プロテスタンティズムの内部で新たに興った宗教運動は敬虔主義であったが、敬虔主義とシュライエルマッハーの宗教理解との関係については先に言及した如くである。

以上見て来た如く、宗教における主観―客観、自然―啓示、内在―超越の対立乃至乖離を前提とする二元性の原理



は、そのいずれの立場に中心を置くとしても、結果的には、宗教の根源的生命と創造性との喪失・涸渇を帰結せしめたと見ることが出来るであろう。シュライエルマッハーが啓蒙主義と正統主義とに対して遂行した種々の批判は、原則的には両者のかかる根本的な欠如態に指し向けられたものである。逆に言えば、彼の弁証論的叙述の枢軸は、この失われた宗教の根源的生命と本源的創造性とを復活せしめることにあった。シュライエルマッハーにとって正にこの復活は、宗教をして、宗教自身の本質を回復せしめ、以て宗教独自の領域と目的とを確保することを可能ならしめる道であった。しかし一体如何にしてシュライエルマッハーはこのような課題を果そうとしたのであろうか。

結論的に言えば、彼はこの困難な問題を解決せんがための可能性を「同一性」の原理と「直接性」の原理のうちに見い出そうとしたと考えることが出来る。ここに言う「同一性」の原理とは、「有限なものにおける無限なものの内在」或は「われわれにおける無制約的・神的なものの現在」を謂う。また「直接性」の原理とは、「同一性の原理の直接経験乃至直接意識」を謂う。この意味で両者は一つの原理の両面をなし、切り離すことの出来ない相即関係にあると見なければならぬ。

さて、シュライエルマッハーがこのような原理に基づいて、新しい宗教理解の可能性を開くことが出来たと仮定するならば、われわれはその原理との関連において、彼の宗教理解が如何なるものであったかを更に具体的に考察・吟味しなければならないであろう。

### 三

シュライエルマッハーが『宗教論』と『信仰論』において与えている宗教乃至敬虔の本質規定、「宗教の本質は宇宙の直観と感情である」及び「敬虔の本質は絶対依存の感情である」の中に、「同一性」と「直接性」の原理が如何ように働き、また両者がどのような連関のうちに現われ出ているかを考察しよう。

「宇宙」という言葉はロマン主義的性格の濃厚な言表であるが、シュライエルマッハーにとってそれは、一切万有の存在とその生起がそこから成り出で且つそこへ帰趨するところのものであると同時に、それが自己自身の内から産出するすべてのものの全体である。換言すればそれは、自然的、歴史的、人間的事象の全体(＝世界の全体)であると同時に、それら一切の存在及び活動の根拠である。この意味で宇宙の直観においては、直観するものと直観されるも

のとは質的に全く相異・断絶しているとは言い得ない。むしろ直観される宇宙(無限)と直観する宇宙(有限)とは根底において同一性をもつものと見做されなければならないであろう。以下の『宗教論』の一節はこのことを明言している。

「すべての有限なるものは、無限なるものからいけば切り出されなければならないところの限界(Grenzen)を規定することによってのみ存立する。かくしてのみ有限なるものは、この限界それ自身の内部にあって無限であり得るし且つ独自なものとして形成されることが出来る。宇宙は間断なく活動し、われわれに各瞬間に自己を啓示している。宇宙が生充に從つて各々別個の現存在を与えるところのあらゆる存在者、宇宙がその豊富にして常に多産な胎内から注ぎ出すあらゆる出来事は、宇宙のわれわれに対する行動(Handeln)である。かくしてすべての個物を全体の一部として、すべての制限されたものを無限なるものの表現として受取ること、それが宗教である。」<sup>⑧</sup>有限なもの(個物)は、無限なもの(宇宙)が自己自身を限定する働きの内に存立せしめられる個別的存在であり、無限なるものの自己表現である。この意味でわれわれと宇宙との関係は、個と普遍、部分と全体との有機的な関係にある。それ故ここに、われわれをして自己自身の内に宇宙の存在と

働きを直観することを可能ならしめる根拠が存する。そしてかかる意味において、宇宙を直観することは、宗教の最も普遍的にして且つ最も高き様式であり、またそこから宗教の本質とその限界とが規定される。<sup>⑨</sup>その場合に直観とは、直観されるものの直観するものへの影響(Einfluss)から、即ち直観されるものの根源的にして独立した行為から出て来る。そして、直観されるものの行為は、その本性に從つて直観するものによって受取られ、総括され、且つ把握される。<sup>⑩</sup>從つて、宇宙を直観するという働きそのものの能動相(純粹能動性)は本来宇宙自身の根源的な行為であり、その受動相がわれわれ有限なるものの直観である。この意味で、形而上学と道徳とが人間を全宇宙におけるあらゆる関係の中心点、あらゆる存在の条件、あらゆる生成の原因として見るのに反して、宗教は、人間並びにあらゆる他の個物において無限者及びその刻印と表現(Abdruck und Darstellung)とを見ようとする。即ち形而上学は、人間の有限な性質から出発して、宇宙が人間にとって何であり得るかを意識を以て規定しようとする。また道徳は、自由の意識から出発して、その自由の王国を無限に至るまで拡張し、その自由にすべてのものを従属させようとする。然るに、宗教は、自由そのものが既に再び自然となつ

てしまつてゐるところに呼吸する。宗教は、人間の特殊な力と人格とが活動する、彼岸において人間を捉える。(Die Religion atmet da wo die Freiheit selbst schon wieder Natur geworden ist, jenseit des Spiels seiner besonderen Kräfte und seiner personalität faßt sie den Menschen.)。かくして宗教は、思索並びに実践の領域から全く脱出することによつてのみ、宗教自身の領域と性格とを主張する。

シュライエルマッハーのかかる見解のうちにはロマン主義の影響が色濃く感じられることは否定し難いが、しかし彼が、人間の諸力を超脱した、内的自然乃至内的生命の奥底に活動する宇宙の根源的生命力と創造力とを宗教において回復せんがために、形而上学及び道德と宗教との相異点を尖鋭化し、以て宗教の純粹性、独自性を確保せんとした弁証に対しては相当の評価がなされてよいであらう。人間の存在と行為との根底を発見し、その根底との生きた関係から人間性を完成せしめることが宗教の目的であり、宗教の積極性である。シュライエルマッハーにおいては、同一性の原理はすべての個物をその根底から生かし内から統一する、個別生命とその有機的統一の原理である。

さて、直観は、常に個々別々なもので、直接的な知覚であり、それ以上でも以下でもない。これらを結合し全体に

総合することは、抽象的思惟の仕事である。それ故に、宗教は宇宙の存在と行動とに關する直接経験において成立している。われわれが宗教に根源的で第一のものとなづけ得る個々の事実や行為のみでなく、すべてのものが宗教においては、直接的で且つそれ自身真理なのである (Alles ist in Religion unmittelbar und für sich wahr.)。換言すれば、宗教自身は「直接性」であり、宗教の真理性は「直接性」のうちに成り立つてゐると言い得る。然るにここで言われる宗教の直接性とは、根源的には自己と自己の存在及び活動の根拠乃至由来 (Woher) との生きた (lebendig) 直接的關係を意味するのであるが故に、われわれ自己意識的な存在にとつてそれは、自己意識と共に自己の根拠に關する内的経験を直接的に包含しているところの「直接的自己意識」乃至「直接経験」を謂う。シュライエルマッハーの「宗教感情」は、本来かかる意味の直接的自己意識乃至直接経験を謂うのであつて、客観性、實在性の欠落した単に主観的な性質の感情ではない。またこの意味においても、シュライエルマッハーの宗教感情は、心理学的考察の対象に還元され得るような対象的意識ではなく、「存在の感情」としてそれ自身は対象化され得ない、いわば「実存感情」であると理解されるべきであらう。宗教感情の有する

かかる実存的性格は、『宗教論』の叙述の中にも窺われるが、しかし『信仰論』における「絶対依存の感情」(schlechtinniges Abhängigkeitsgefühl)という概念的に一層厳密に規定された言表のうちにより明確に認識され得る。つまり『宗教論』において宗教感情は、われわれの内部意識への宇宙の影響及び刺激(Erregung)と見做され、それは本質的に直観と結びついていて、両者は切り離すことの出来ない不離一体の関係にあると語られている。しかし『信仰論』においては「直観」という言葉は最早使用されずに、宗教領域における感情は、「直接的」という規定が付加されて「直接的自己意識」(unmittelbares Selbstbewusstsein)として概念的に一層明確化されると共に、本来の感情状態そのものの表象としての対象化された「対象的意識」とは区別されている。このことは、本来の感情は直接的自己意識であり、直接的自己意識としての本来の宗教感情は、全体的な、分割され得ない現存在の直接的現在に本有的に属する有の構成契機であることを意味するであらう。

然るに、シュライエルマッハーによれば、かかる宗教感情としての敬虔の本質は「絶対依存の感情」である。それは、われわれが自己自身を絶対的に依存しているとして(cals schlechthin abhängig) 換言すれば神と関係してい

るとして意識することであるが、ここで肝要なことは、「絶対的」(schlechtthin)という言表が付加されているということと、またそれが如何なる事態を意味しているかということである。

P・ティリッヒの解釈に従えば、「絶対的依存の感情」というように、感情が絶対的乃至無制約的依存と結合された瞬間に、心理学的領域は超えられてしまっている。なぜなら、心理学的な意味に理解されたすべての種類の感情は制約されたものであるから。他方、「無制約的なもの」の経験は、このような主観的感情とは全く別物である。それ故、絶対的依存の感情は個人の主観的感情というようなものではなく、ヘーゲルの批判が不正であることは全く明瞭である。⑧そしてティリッヒは、彼の「究極的関心」(ultimate concern)とシュライエルマッハーの「絶対依存の感情」とが非常に類似していて、両者は共に主観・客観図式を超えようとするにおいて同じ根本動機をもつ、聖なるものの全体的経験の表現であることを指摘している。⑨

さて、われわれの見解としては、シュライエルマッハーの「絶対依存の感情」が、ヘーゲルの批判するように単に主観的・即自的な個人の感情にすぎないという見方には肯首し難いが、⑩しかしそれは、R・オットーの指摘している

如く、主観的・経験的要素の濃い意味内容をもった言表であることは認めなければならないであろう。そして絶対依存の感情は、無制約・神的なものと、個別的・経験的なものとが自己意識の内で主観―客観の対立・矛盾を超えて、即且対自的に現在している「高次の自己意識」(höheres Selbstbewußtsein)へ主観―客観の対立している感覚的自己意識(sinnliches Selbstbewußtsein)と区別されたとして理解されるべきであろう。世界内存在としてのわれわれの日常的存在意識は、自己と他者との相対的対立関係において成立する「感覚的自己意識」である。即ち、現実と交渉する際に自発的活動性が強い場合には「自由」を感じる。この自由感情が減ずる場合には、われわれは他者やあらゆる種類の有限なものへの「依存」を感じる。しかし絶対的依存の直接的意識は、自己と世界及び他者との相対的關係において成立する部分的自由と部分的依存の混合した感情を止揚・超脱する。換言すれば、絶対的なものの意識は、自己において、あらゆる有限なものの経験の全領域を絶対的に超越する。かかる意味において絶対依存の感情は、われわれの絶対的なものへの実存的関与と究極的関心を指し示す、宗教経験の全体的表現であると言うことが出来る。

シュライエルマッハーは、われわれが神について語る場合、この「神」という言表の真に根源的な意味は、われわれの受動的且つ自己活動的現存在の自己意識の内に、自己意識と共に指定された絶対依存の「由来」(Woher)であると言う。換言すればそれは、われわれの存在様態(Sosein)を絶対的にそこへ帰趨せしめるところのものを意味する。従って神という言葉は、絶対依存の感情の表現以外の何ものでもなく、この感情によってのみ制約され、規定される。かかる意味で神は形而上学的乃至イデア的実在のように客体的に与えられている対象的実在として考えられなければならない。神はすべての相対的・有限な関係を超出し、それらすべての根拠であると同時に、神はわれわれの直接的意識のうちに現在しており、われわれが神について語るすべてはこの直接性の表現である。超越的客体としての「神の本質」乃至「本性における神」についてわれわれは何も語ることは出来ない。われわれはただ神との絶対的依存の關係に基づいてのみ、啓示経験を通してあらわとなることを理解し、語ることが出来るだけである。

以上見て来た如く、シュライエルマッハーにとって宗教は、自己のうちにおける無限者(宇宙)の直観と感情であり、敬虔の本質としての絶対依存の感情であった。宗教

は、反省的行為に先立つ直接的な実存的関係であり、われわれの意識における無制約者(神)の意識の直接性であった。そしてこれらすべての言表は、宗教的生の直接的経験と同じ現実を指し示すものであった。これに対して、知識と行為は反省の結果である。宗教的知識と行為は、この直接的意識乃至直接的経験から発現するが、しかしそれは既に宗教固有の本質には属さない。

## 結 び

以上に考察して来たように「同一性」と「直接性」の原理に基づいて、直観的・感情的要素を重視するシュライエルマッハーの宗教理解は、近代的主体(自我)の二つの側面の一方(反省的・思弁的側面)と半ば対立的・批判的關係に立ち、他のもう一方(直観的・経験的側面)と半ば受容的・宥和的關係に立ちつつ、しかし全体としては近代的主体性の立場を基底として出現した近代的人格の強いものであった。そして彼のこのような宗教理解は、一方で宗教における歴史・実証的、経験的なものの有意義性を再発見し、その神学的展開への新しい可能性を開き、他方で宗教の実存的関与とかかる立場に基づいた近代的組織神学への新しい方向を指し示した。この意味で彼の宗教理解は、

近代精神とその宗教理解との思想的連関構造を全体的によく映反していると思われることが出来るであろう。しかし、シュライエルマッハーのかかる宗教理解が果して宗教理解の新しい可能性を開き、宗教の真の本質を全面的に且つ正當に捉えた見方であるか否かということは、また別の考察に属する問題であり、最早本論の主題ではないので後日の機会に譲りたい。

- ① F. Schleiermacher Werke 4, Auswahl hrsg. v. O. Braun u. J. Bauer, 1976, Über die Religion (以下 U. d. R. と略す) S. 240. 引用におけるは佐野勝也・石井次郎訳に負うところ多し。
- ② F. Schleiermacher, Der christliche Glaube, hrsg. v. M. Redeker, 1960, (以下 Der chr. Glaube と略す) § 3.
- ③ Vgl. ibid., § 4.
- ④ Vgl. St Thomas A., Summa Theologiae, XLI 2a 2ae 101—122, Question 101. piety.
- ⑤ 桂壽一著『近世主体主義の発展と限界』、朝永三十郎著『近世に於ける「我」の自覚史』等を参照。
- ⑥ Vgl. Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Religion, Einleitung u. Erster Teil.
- ⑦ Vgl. Kant, Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft u. Vorredenentwürfe zur Religionsphilosophie.
- ⑧ シュライエルマッハーの生い立ち及び彼の思想形成については W・ディルタイ著『Leben Schleiermachers, 及び大

島豊著『世界大思想家選集中の『シュライエルマッハー篇』を参照。

- ⑨ Vgl. P. Tillich, Vorlesungen über die Geschichte des christlichen Denkens Teil II: Aspekte des Protestantismus im 19. und 20. Jahrhundert, hrsg. u. übers. v. Ingeborg C. Henel, 1972, S. 66.
- ⑩ 十八世紀から十九世紀に互つての思想的・神学的動向に関しては次の文献を参照。P・ティリッヒの上記の書。『カール・バルト著作集Ⅱ、十九世紀のプロテスタント神学』、『講座・近代思想史Ⅲ、理性と啓蒙の時代』、山崎正一著『近代思想史論』等。
- ⑪ Ü. d. R. S. 242.
- ⑫ ibid., S. 241.
- ⑬ Vgl. ibid., S. 243.
- ⑭ ibid., S. 243.
- ⑮ Vgl. ibid., S. 240 f.
- ⑯ Vgl. ibid., S. 245.
- ⑰ シュライエルマッハーの宗教意識乃至宗教感情についての実存的性格を指摘する見解として次の書を参照。ティリッヒの上記の書。 Marianna Simon, La Philosophie De La Religion Dans L'Œuvre De Schleiermacher, 1974, Chap. III.
- ⑱ Vgl. Ü. d. R. S. 250.
- ⑲ P. Tillich, Aspekte des Protestantismus im 19. und 20. Jahrhundert, S. 78.
- ⑳ Vgl. ibid., S. 80.
- ㉑ ヘーゲルの『宗教哲学講義』中の Die Form des Gefühls に関する批判的な一節は、シュライエルマッハーの宗教感情を念頭において論叙されたものであろう。
- ㉒ R・オットーは『Das Heilige』の中で、シュライエルマッハーの「絶対依存の感情」という表現について、三つの問題を指摘している。
- ㉓ Vgl. Der chr. Glaube, §4, 4.
- ㉔ Vgl. ibid., §4, 4.
- ㉕ 森田雄三郎著『キリスト教の近代性』、第三章神学的領域における歴史的個性の発見(シュライエルマッハー)参照。(本学助手 宗教学)